

# 岡山方言の副助詞ヤコ(一)の使用に関する実態調査

星野 佳之<sup>※</sup>

A Report on Usage of the Adverbial Particle YAKO/YAKOO in the Okayama Dialect

Yoshiyuki HOSHINO

## 1. はじめに

岡山方言の助詞の一つに、「ヤコー／ヤコ」(以下、「ヤコ(一)」と記す)というものがある。共通語のナンカ／ナンテと対比されて捉えられてきたもので、

(1) 納豆ヤコ(一) 食べれんわ。(納豆なんか食べられない。)

などと用いられるようである。岡山方言の「例示」の一形式と言えよう。

この語の分布については、『方言文法全国地図』第54図「傘なんか(いらぬ)」において、〈jakoo〉という言い方が岡山県南を中心として行われていることを確認できる。また藤原与一(1976)が地図番号27「おしろいなど」の項で、次のように述べる。

老年層図では、「～ナンカ」[nan̄ka]が全域にあって、広島・山口・九州には、とくにこれがさかんである。「～ヤコト」[jakoto]が淡路に多い。〈中略〉「～ヤコト」が、近畿系のものであることも明白であるが、「～ヤコ」も、近畿系のもとし得ないこともない。ただ、岡山県下での、これのさかんな分布が、とくに問題とされるが、これも、近畿に近い岡山であってみれば、このさい、岡山県下も、近畿・四国につらなる言いかたを示していると、見ることもできるかと思う。

これらを踏まえつつ、ヤコ(一)について最も詳細に考察したものが、友定賢治(1992)である。これはそれまでの自然傍受と、3名のインフォーマントを対象に集中的に行った質問調査とによって得た資料をもととした考察である。その3名は大正12年、同13年、昭和4年生まれの生え抜きの新見市坂本方言話者であり、同論所載の用例は貴重な方言資料でもある。この資料から友定は、ヤコ(一)の用法として次の七つを指摘した<sup>注1</sup>。

- |        |                                   |
|--------|-----------------------------------|
| a 軽視   | アノ <u>タヤコー</u> ナンポーニモ ナリヤー シェン。   |
| b 謙遜   | ウチラ <u>ヤコー</u> ナンモ シランノジャ。        |
| c 取り立て | シェキ <u>ヤコーガ</u> エカロー。             |
| d 強調   | ケーツ <u>ヤコー</u> ゴ。 エー コトバー ショールナー。 |
| e 反撥   | トツタリ <u>ヤコー</u> スリヤー ヘナー ナ。       |

キーワード：ヤコー，ナンカ，例示

Keywords: NANKA, exemplification

※ 本学文学部日本語日本文学科

f 例示 ジュースヤコー ツメテヤー モノー デャーチャリンシャー。

g 統括 ウシヤウマヤコー オリヤー シェン。イマゴラー。

友定論は管見の限り、ヤコーについて集中的に論じた唯一の考察である。また、「ヤコーと交替可能なもの」として、ラ（一）／ドモ／ナンキヤー／ヤナンキヤー／コトナ／カンズ／ヤラ／ニャート／ジャンジャー／ジャコトナについても用例を収集して言及する。特にジャコトナなどは、先の藤原論と併せて考えたとき、ヤコ（一）の成立過程の理解にも考察の材料を提供し得るものと思われる。

一方で、同論の a～g の用法の区別は、必ずしも分明でないところがある（a 軽視、b 謙遜と c 取り立ての関係など）。また、上述の通り資料が新見市坂本方言の、しかも相当に古いものに限定され、更に調査が行われた 1991 年から既に 30 年弱の年月が過ぎている。岡山県南を中心になお活発に用いられると考えられるヤコ（一）について、改めて調査することも無益ではあるまいと考え、アンケート調査を試みた。本稿はその報告である。

## 2. 本稿で分析対象とするデータと調査概要

調査は 2019 年 9 月に行った。ノートルダム清心女子大学の学内連絡システムを經由して所属する教職員全員にアンケート用紙を送り、プリントアウトして記入の上返送してもらった。また、教職員を通じて学外の人たちからの回答も得られた。その結果、学内外の 15 歳～84 歳（2019 年 9 月 1 日現在）の男女 76 名から回答を得た。但し、無効の回答（記載なし、相互に矛盾する複数回答等）のために、以下の考察においては合計が必ずしもこの数値に一致しない場合がある。特に、フェイスシートを含む後半を欠いた回答が 1 名分あったために、性別等回答者の属性に関する数値は合計 75 を超えることがない。

フェイスシートによると回答者の内訳は次の通りである。

表 1 回答者の内訳・性別

	男性	女性	合計
実数	23	52	75
割合	31%	69%	100%

表 2 回答者の内訳・年代別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
実数	1	23	11	16	14	9	0	1	75
割合	1%	31%	15%	21%	19%	12%	0%	1%	100%
実数	24					9			
割合	32%					12%			

表 3 「15 歳まで（中学を卒業するまで）の最長居住地はどこか」

	岡山県	岡山県外											合計
		千葉県	長野県	岐阜県	大阪府	兵庫県	香川県	広島県	島根県	愛媛県	宮崎県	外国	
実数	57	1	1	1	1	2	4	3	1	1	1	1	74
割合	77%	1%	1%	1%	1%	3%	5%	4%	1%	1%	1%	1%	100%
実数	17												
割合	23%												

表4 「現在の住まいはどこか」

	岡山県	大阪府	香川県	広島県	合計
実数	66	1	1	1	69
割合	96%	1%	1%	1%	100%

女性の回答者の割合が多い(表1)。年代別では、10代が1名、70代0名、80代1名の他は、大きく偏ることなく回答が得られた(表2)。なお、今後回答者の年代を考慮に入れる場合は、10代を20代に、80代を60代に含めて、それぞれ「10～20代」「60～80代」として扱う。

「15歳までの間で一番長く住んだところはどこか」という問には、「岡山県」の回答が77%を占める(表3)。以降、この層を岡山県にて言語形成期を過ごした人達として、「岡山方言話者」「県内出身者」と呼ぶ。「岡山県外」の回答の内訳はそれぞれに少数で、最大でも香川県が5%を占めるに留まる。この県外で言語形成期を過ごした人達を以降は一括して、「県外出身者」と呼ぶ。この層の割合は全体の23%であるが、現在の居住地を県外とする回答の割合は3%にまで下がる(表4)。即ち、岡山方言を第一言語としない人達が23%回答しているのだが、その人達も圧倒的多数が岡山県内に居住しているわけである。よって今回の調査は、岡山県在住の県内および県外出身者の言語意識調査ということになる。

### 3. 調査結果

以下、調査の結果を分析する。まずこの語がどのような人達に使用されているかを明らかにする。次いでヤコ(一)の文法的性格を明らかにし、然る後に他の同類の共通語の形式との対比により、意味的性格について分析を試みる。

#### 3.1. 回答者の属性による分析回答者の属性による分析

##### 3.1.1. 回答全体におけるヤコ(一)の使用状況

今回のアンケート調査では、ヤコ(一)を含んだ様々な文、更には比較のためにヤコ(一)を含まないいくつかの文について、「次のような言い方について、自分で言うことはありますか?」と問い、「1 言うことがある/2 言わないが聞いたことはある/3 言わないし聞いたこともない/4 わからない」のいずれかを答えてもらった。

例えば、

(2)「そんなこと知らん」

(3)「そんなこと知りません」

という文についての回答は、それぞれ次のようになる。

表5 「そんなこと知らん」について

	1	2	3	4	無効	合計
実数	62	11	1	0	0	74
割合	84%	15%	1%	0%	0%	100%

表6 「そんなこと知りません」について

	1	2	3	4	無効	合計
実数	61	10	3	1	0	75
割合	81%	13%	4%	1%	0%	100%

(2) (3) のいずれも特異な表現であるとは思われず、回答も「1 言うことがある」「2 言わないが聞いたことはある」を合わせたものがそれぞれ (2) 99%、(3) 94%を占める。

これに対して、「そんなことヤコ (一) 知らん」についての回答は次の通りである。

表 7 「そんなことヤコ (一) 知らん」について

	1	2	3	4	無効	合計
実数	41	19	10	4	0	74
割合	55%	26%	14%	5%	0%	100%

回答 1・2 を合わせた者が 81% で、多数がこの言葉を使用するか、或いはこれに接していることが分かるが、「3 言わないし聞いたこともない」「4 分からない」の合計も 19% に上る。これと同様の例として、「納豆ヤコ (一) 食べれんわ」「ハワイ ヤコ (一) どう? 今が一番ええ頃よ。」についての結果も次に載せる。

表 8 「納豆ヤコ (一) 食べれんわ」について

	1	2	3	4	無効	合計
実数	42	21	9	2	0	74
割合	57%	28%	12%	3%	0%	100%

表 9 「ハワイ ヤコ (一) どう? 今が一番ええ頃よ。」について

	1	2	3	4	無効	合計
実数	37	16	19	2	1	75
割合	49%	21%	25%	3%	1%	100%

両者とも 1 (言うことがある)・2 (言わないが聞いたことがある) の合計はそれぞれ 85% と 70% とやはり優勢である。すなわちこれらも「許容度の高い」用法である。その一方で、3 (言わない)・4 (分からない) の合計が 15% と 28% と、一定数存在する。前掲の「そんなこと知らん」(表 5)「そんなこと知りません」(表 6) に比すれば、「相対的に許容度の劣る」表現でもある。「言わない」「分からない」という回答の事情には、明確に「使用しない言葉である」というものから、聞いたことがないので「判断のしようがない」というものまで様々に考えられるが、ヤコ (一) の表現に違和感を持つ層が一定数存在することが分かるのである (以下このように本稿では回答 1・2 および 3・4 の値の合計それぞれの大小により、「許容 (度)」を判断する)。

### 3.1.2. ヤコ (一) の使用状況と性差

この、ヤコ (一) の許容度が低い層とは、具体的にはどのような人々であろうか。まず性差の有無を確認すべく、先の「そんなことヤコ (一) 知らん」「納豆ヤコ (一) 食べれんわ」「ハワイヤコ (一) どう?」について、性別を含めて回答を集計したものが表 10～12 である。

表 10 「そんなことヤコ（一）知らん」について（男女別）

		1	2	3	4	合計
全体	実数	41	19	10	4	74
	割合	55%	26%	14%	5%	100%
男性	実数	11	4	5	2	22
	割合	50%	18%	23%	9%	100%
女性	実数	29	16	5	2	52
	割合	56%	31%	10%	4%	100%

表 11 「納豆ヤコ（一）食べれんわ」について（男女別）

		1	2	3	4	合計
全体	実数	37	16	19	2	75
	割合	49%	21%	25%	3%	100%
男性	実数	8	7	6	1	22
	割合	36%	32%	27%	5%	100%
女性	実数	28	10	13	1	52
	割合	54%	19%	25%	2%	100%

表 12 「ハワイヤコ（一）どう？ 今が一番ええ頃よ。」について（男女別）

		1	2	3	4	合計
全体	実数	37	16	19	2	75
	割合	49%	21%	25%	3%	100%
男性	実数	8	7	6	1	22
	割合	36%	32%	27%	5%	100%
女性	実数	28	10	13	1	52
	割合	54%	19%	25%	2%	100%

いずれの間においても、回答1と2、3と4の多少の出入りはあるものの、男性女性ともに7割前後の人達が「言うことがある／聞いたことがある」と答え、許容度の高い層が優勢である。すなわちヤコ（一）の使用に関して性差はないということである（このために本稿の分析においては、以降性差を観点としない）。

### 3.1.3. ヤコ（一）の使用状況と言語形成の地

一方で、言語形成期を県内で過ごしたか否かは、この語の許容に大きく影響している。先の「そんなことヤコ（一）知らん」「納豆ヤコ（一）食べれんわ」「ハワイヤコ（一）どう？」について、今度は県内で言語形成期を過ごしたか県外であったかの観点を加えて集計すると、次の通りである。

表 13 「そんなことヤコ（一）知らん」について（県内外別）

		1	2	3	4	無効
全体	実数	41	19	10	4	0
	割合	55%	26%	14%	5%	0%
県内	実数	38	15	2	2	0
	割合	67%	26%	4%	4%	0%
県外	実数	2	3	8	1	0
	割合	14%	21%	57%	7%	0%

表 14 「納豆ヤコ（一）食べれんわ」について（県内外別）

		1	2	3	4	無効
全体	実数	42	21	9	2	0
	割合	57%	28%	12%	3%	0%
県内	実数	39	17	1	0	0
	割合	68%	30%	2%	0%	0%
県外	実数	2	3	8	1	0
	割合	14%	21%	57%	7%	0%

表 15 「ハワイヤコ（一）どう？ 今が一番ええ頃よ。」について（県内外別）

		1	2	3	4	無効
全体	実数	37	16	19	2	1
	割合	49%	21%	25%	3%	1%
県内	実数	34	16	19	2	1
	割合	45%	21%	25%	3%	1%
県外	実数	2	2	12	1	0
	割合	12%	12%	71%	6%	0%

県内出身者は1・2を合わせた回答が表 13 が 93%、表 14 が 98%、表 15 が 66%である。表 13・14 に比べて表 15 の数値が目立って低いのは留意されるが、それでもこれを含めてヤコ（一）は県内出身者にとっては、相当に優勢な使用状況を見せる。

一方で県外出身者は、3・4を合わせた回答の方が圧倒的に優勢で、表 13 が 64%、表 14 が 64%、表 15 が 77%となる。過半数の県外者が「聞いたこともない」と答える、正に岡山特有の方言形式であると言えよう。

更に興味深く思われるのは、次のような例に対する回答の、県内・県外の異同である。

表 16 「挨拶ぐれえちゃんとしねえ。」について（県内外別）

		1	2	3	4	無効
県内	実数	34	22	0	1	0
	割合	60%	39%	0%	2%	0%
県外	実数	2	9	1	0	0
	割合	17%	75%	8%	0%	0%

表 17 「太郎はゲームばあしょーる。」について（県内外別）

		1	2	3	4	無効
県内	実数	46	10	1	0	0
	割合	81%	18%	2%	0%	0%
県外	実数	3	8	1	0	0
	割合	25%	67%	8%	0%	0%

「挨拶ぐれえちゃんとしねえ」も「太郎はゲームばあしょーる」も、いずれも相応に岡山方言的な言い様を含む（下線部）が、これらの表現については県外出身者であっても、「言わないが聞いたことはある」と回答した人が表 16 で 75%、表 17 で 67%であり、ついで「言うことがある」も 17%、25%である。逆に「言わないし聞いたこともない」という人は 1 名しかいない。即ち県外出身者においても、許容度が極めて高い。岡山の方言形として、或いは自らの方言にもある同様の言い方として、これらの言い方については、県外出身者も十分に理解し、場合によっては自ら使用もしているのである。

前節で確認した通り、今回回答した県外出身者はその大半が岡山県内に在住しており、日常的に岡山方言に接しているわけである。とすれば表 16・17 に見られるように、方言的形式に対しても彼らが一定の理解をしている状況の方が自然であろう。逆に言えば、そういう人達がなお「聞いたこともない」と答えるヤコ（一）は、それだけ際立った方言性を有する形式だと言えるのである（よって、以下にヤコ（一）の用法を考察する場合には、主として県内出身者の回答を参照することとする）。

#### 3.1.4. ヤコ（一）の副助詞的性質の確認

さて、友定賢治（1992）がこの語を「副助詞」とするのは恐らく自明に正しいものであろうけれども、この語の主たる使用者である県内出身者の使用実態から、本節で念のためにヤコ（一）の「副助詞性」について確認しておく。

##### 3.1.4.1. 係助詞ハ・モとの承接

まず係助詞ハ・モとの承接のしかたを見る。

表 18 「僕ヤコ（一）は、経済のことは分らん。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	24	24	9	2	0	59
割合	41%	41%	15%	3%	0%	100%
	81%		19%		0%	

表 19 「僕はヤコ（一）、経済のことは分らん。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	0	0	56	3	0	59
割合	0%	0%	95%	5%	0%	100%
	0%		100%		0%	

表 20 「太郎ヤコ（一）も、経済のことは分らんじゃろな。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	18	20	19	2	0	59
割合	31%	34%	32%	3%	0%	100%
	64%		36%		0%	

表 21 「太郎もヤコ（一）、経済のことは分らんじゃろな。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	2	0	55	1	1	59
割合	3%	0%	93%	2%	2%	100%
	3%		95%		2%	

表 18・20 のハ・モ後接に対して、表 19・21 の前接の場合、圧倒的に 3・4 の回答率が高い。すなわちヤコ（一）は係助詞ハ・モに前接し、後接はしない。これは次のようにナンカも同様であって、副助詞に一般的に見られる特徴である。

(4) 僕 なんか {は／も}、経済のことは分かりません。

\* 僕 {は／も} なんか、経済のことは分かりません。

### 3.1.4.2. 格助詞との承接

更に、格助詞との接続についても概観する。まずガ格との承接のありようを確認する。

表 22 「私ヤコ（一）が作る作品は、全国大会では入選せんじゃろう。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	23	25	10	1	0	59
割合	39%	42%	17%	2%	0%	100%
	81%		19%		0%	

表 23 「私がヤコ（一）作る作品は、全国大会では入選せんじゃろう。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	1	2	55	1	0	59
割合	2%	3%	93%	2%	0%	100%
	5%		95%		0%	

ガ格助詞と連接する際には、ガの前接は厳しく制限され、後接のみ許容される。この点でもヤコ（一）はナンカと平行的である<sup>注2</sup>。

(5) 私 ヤコ（一）が作る作品は、入選せんじゃろう。

\* 私 がヤコ（一）作る作品は、入選せんじゃろう。

(6) 私 ナンカが 作る作品は、入選しないよ。



\* 私 がナンカ 作る作品は、入選しないよ。

次にヲ格であるが、こちらはより複雑な実態を見せる。ガ格に比べると、前接がある程度許容されるのである。これに年代差が関わっているか否かを確認するために、年代毎の集計も掲載する。

表 24 「納豆をヤコ（一）食べれんわ。」（県内、年代別）

		1	2	3	4	無効	合計
全体	実数	3	10	45	1	0	59
	割合	5%	17%	76%	2%	0%	100%
		22%		78%		0%	
10・20代	実数	1	3	17	1	0	22
	割合	5%	14%	77%	5%	0%	100%
		18%		82%		0%	
30代	実数	0	0	8	0	0	8
	割合	0%	0%	100%	0%	0%	100%
		0%		100%		0%	
40代	実数	1	1	8	0	0	10
	割合	10%	10%	80%	0%	0%	100%
		20%		80%		0%	
50代	実数	1	6	6	0	0	13
	割合	8%	46%	46%	0%	0%	100%
		54%		46%		0%	
60～80代	実数	0	0	6	0	0	6
	割合	0%	0%	100%	0%	0%	100%
		0%		100%		0%	

表 25 「納豆ヤコ（一）を食べれんわ。」（県内、年代別）

		1	2	3	4	無効	合計
全体	実数	11	17	30	1	0	59
	割合	19%	29%	51%	2%	0%	100%
		47%		53%		0%	
10・20代	実数	2	7	12	1	0	22
	割合	9%	32%	55%	5%	0%	100%
		41%		59%		0%	
30代	実数	1	1	6	0	0	8
	割合	13%	13%	75%	0%	0%	100%
		25%		75%		0%	
40代	実数	1	1	8	0	0	10
	割合	10%	10%	80%	0%	0%	100%
		20%		80%		0%	
50代	実数	5	6	2	0	0	13
	割合	38%	46%	15%	0%	0%	100%
		85%		15%		0%	
60～80代	実数	2	2	2	0	0	6
	割合	33%	33%	33%	0%	0%	100%
		67%		33%		0%	

ヲ格の場合は、先のヲ格助詞を伴わない「納豆ヤコ（一）食べれんわ。」（表11）の方が許容度が高く、接続しないことがより一般的であるものの、前接は或る程度許容される。またより少数ながら後接を許容する層も存在する。年齢別の集計結果を見ても、経年的に許容度が増加する／減じるなどの規則性を見出すことができない（以下に述べる例も同様の手続により確認したところ、許容度と年代に相関関係は見出せなかった。よって以降基本的に年代別の集計結果には言及しない）。

(7) 納豆 ヤコ（一） 食べれんわ。

?? 納豆 をヤコ（一） 食べれんわ。

? 納豆 ヤコ（一）を 食べれんわ。

まとめれば、ヤコ（一）を用いる際はヲ格は明示されないのが通常であり、それを敢えてしようとする、前接後接とで揺れを見せる。しかしガ格ほど前接を明確に排除するものではない、ということだが、この状況自体がやはりナンカ等と並行的である。

(8) 納豆 なんか 食べられないよ。

?? 納豆 をなんか 食べられないよ。

? 納豆 なんかを 食べられないよ。

特にナンカ・ヲの形は、「納豆を食べる」という文ではそぐわないかもしれないが、「芸能人なんかを見た日には」などの言い方では十分に許容されると考えられる。同様の状況がヤコ（一）にも存する可能性がある。

次に二格との関係を見よう。二格については、次の二通りについて尋ねた。

表 26 「弟ヤコ（一）負けんわ。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	5	7	45	2	0	59
割合	8%	12%	76%	3%	0%	100%
	20%		80%		0%	

表 27 「病院ヤコ（一）行かんわ。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	38	16	5	0	0	59
割合	64%	27%	8%	0%	0%	100%
	92%		8%		0%	

「弟ヤコ（一）負けんわ。」の方が相対的に許容度が低いのは、「弟」が述語「負けん」に対してガ格・二格どちらにも立ち得る（「弟が負けない」のか「弟に負けない」のか文意が不明）ということに依るだろう。こういう問題を抱えない「行かん」に対する「病院」の場合は、実際にはほぼ問題なく許容されるのである。故にもう一方の文でも、「弟に負けん」と二格が明示される場合にはヤコ（一）が問題なく許容される。

更に、「弟に負けん」「病院に行かん」いずれの場合も、前接・後接それぞれがほぼ8割以上の許容度を示す。

表 28 「弟にヤコ（一）負けんわ。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	25	21	11	2	0	59
割合	42%	36%	19%	3%	0%	100%
	78%		22%		0%	

表 29 「弟ヤコ（一）に負けんわ。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	34	23	2	0	0	59
割合	58%	39%	3%	0%	0%	100%
	97%		3%		0%	

表 30 「病院にヤコ（一）行かんわ。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	27	21	11	0	0	59
割合	46%	36%	19%	0%	0%	100%
	81%		19%		0%	

表 31 「病院ヤコ（一）に行かんわ。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	26	23	9	1	0	59
割合	44%	39%	15%	2%	0%	100%
	83%		17%		0%	

この二格標示の場合の、前接・後接が共に許容される現象も、多くの副助詞に見られるものである。

- (9) 病院 {にヤコ（一）／ヤコ（一）に} 行かんわ。  
 (10) 病院 {にナンカ　／ナンカに}　　行かないよ。  
 (11) 病院 {にダケ　　／ダケに}　　行きました。

以上、ヤコ（一）が係助詞・格助詞と接続する際の統語的振る舞いが、他の副助詞類と共通することを確認した。

### 3.1.4.3. 他の副助詞との関係

それでは今回の調査からうかがえるヤコ（一）の副助詞としての性質とはどのようなものか。共通語を含む他の副助詞との共起制限を確認することで、ヤコ（一）の性質を捉える手がかりを得ようと思う。まずはコソとの共起関係から確認する。

表 32 「太郎ヤコ（一）適任じゃねえ？」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	19	10	30	0	0	59
割合	32%	17%	51%	0%	0%	100%
	49%		51%		0%	

表 33 「太郎ヤコ（一）こそ適任じゃねえ？」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	5	8	46	0	0	59
割合	8%	14%	78%	0%	0%	100%
	22%		78%		0%	

「適任」に該当する者のとりたての際は、ヤコ（一）単独でも半数程度の許容度であり、この点はナンカと相異なる。一方、コソと共起した場合は許容しない回答が8割弱にまで上る。この許容度の低さに、コソ自体の性質が関わっているとは考えにくい。というのは次の通り、コソは単独でなら、「太郎…適任じゃねえ？」という方言的表現の中に95%という極めて高い許容度を以て収まるからである。

表 34 「太郎こそ適任じゃねえ？」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	46	10	2	1	0	59
割合	78%	17%	3%	2%	0%	100%
	95%		5%		0%	

これはナンカと同様の現象である。

- (12) ? 太郎 ヤコ（一） 適任じゃねえ？  
 \* 太郎 ヤコ（一）こそ 適任じゃねえ？  
 (13) 太郎 ナンカ 適任じゃない？  
 \* 太郎 ナンカこそ 適任じゃない？

この現象は、次のように解釈できる可能性がある。「適任」とは既に該当者を相当に限定する条件であるが、そこに取り立てるものが「太郎」のようなそれ自体は評価を持ちにくい語である場合、辛うじてヤコ（一）が関与し得る。それが卓立的なコソと結ぶと、もはやヤコ（一）・ナンカの「例示」の性質と齟齬するのだ、と。このような視点からは、次のような例にヤコ（一）が立ちにくいのも同様に理解できる。

表 35 「挨拶ぐれえちゃんとしねえ」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	34	24	0	1	0	59
割合	58%	41%	0%	2%	0%	100%
	98%		2%		0%	

表 36 「挨拶ヤコ（一）ちゃんとしねえ」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	6	11	39	3	0	59
割合	10%	19%	66%	5%	0%	100%
	29%		71%		0%	

「ちゃんとしねえ（ちゃんとしなさい）」という文脈上、「挨拶」とは社会生活の上で最も当然視されるものとして、語が既に評価的内容なりスケールの価値なりを含み持っている。そういう場合に一般に「最低限」の用法と言われるグレエ（クライ）がふさわしいというのは理解しやすいところである。その文脈ではヤコ（一）の許容度の低いということは、即ち「最低限」用法にヤコ（一）が対応しないことを表す。

更に、次のようなデモの例は、一般に「極端」の用法と言われるものである<sup>(注3)</sup>。このデモが立ち得るところにもヤコ（一）が許容されにくいのは、「意外性の高いもの」という前接語の文脈上の価値が要因なのではないだろうか。

表 37 「人間いざとなりゃあ草でも食べる」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	45	13	1	0	0	59
割合	76%	22%	2%	0%	0%	100%
	98%		2%		0%	

表 38 「人間いざとなりゃあ草ヤコ（一）食べる」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	7	10	41	1	0	59
割合	12%	17%	69%	2%	0%	100%
	29%		71%		0%	

要するに、卓立的コソ、最低限グレエ（クライ）、極端デモのいずれとも関わろうとしないヤコ（一）は、こうした価値的大小と無縁の例示形式であることが、示唆されるのである。

その点で興味深く思われるのは、次のような例の許容度である。

表 39 「ハワイヤコ（一）どう？ 今が一番ええ頃よ。」について（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	35	15	7	1	1	59
割合	59%	25%	12%	2%	2%	100%
	85%		14%		2%	

表 40 「これヤコ（一）よう似合うと思うんじゃないけどな」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	37	13	8	0	1	59
割合	63%	22%	14%	0%	2%	100%
	85%		14%		2%	

表 41 「僕ヤコ（一）花束よりケーキがええな。」（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	17	22	18	1	1	59
割合	29%	37%	31%	2%	2%	100%
	66%		32%		2%	

最も許容度の低い「僕ヤコ（一）花束よりケーキがええな」でも、回答1・2の合計が66%を占めるのであるから、これらの表現の許容度は、決して低いわけではない。しかしその一方で、これまでに見てきた「そんなことヤコ（一）知らん」や「納豆ヤコ（一）食べれんわ」に比べれば、相対的に1・2の回答率が低く、また3・4の合計が相当に高いこと、明らかである。

表 42 そんなことヤコ（一）知らん（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	39	16	2	2	0	59
割合	66%	27%	3%	3%	0%	100%
	93%		7%		0%	

表 43 納豆ヤコ（一）食べれんわ（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	40	18	1	0	0	59
割合	68%	31%	2%	0%	0%	100%
	98%		2%		0%	

「そんなことヤコ（一）知らん」「納豆ヤコ（一）食べれんわ」は、回答1・2の合計がいずれも高い、安定した用法であることをうかがわせる。参考として県外者も理解する「挨拶ぐれえちゃんとしねえ。」「太郎は ゲーム ばあ しょーる。」についての結果も再掲するが、これらの場合と大差ない高い使用状況である。

表 44 「挨拶ぐれえちゃんとしねえ。」について（県内）

	1	2	3	4	無効	合計
実数	40	18	1	0	0	59
割合	68%	31%	2%	0%	0%	100%
	98%		2%		0%	

表 45 「太郎は ゲーム ばあ しょーる。」(県内)

	1	2	3	4	無効	合計
実数	48	10	1	0	0	59
割合	81%	17%	2%	0%	0%	100%
	98%		2%		0%	

これらを踏まえて表 39 「ハワイ ヤコ (一) どう? 今が一番ええ頃よ。」、表 40 「これヤコ (一) よう似合うと思うんじゃけどな」、表 41 「僕ヤコ (一) 花束よりケーキがええな。」に戻れば、回答 3・4 の合計が全体でもそれぞれ 14%、14%、32%に上る。これらの用例については、県内出身者でも、相対的に違和感を持つ人が多いということである。

すなわち、同じヤコ (一) ながら、次の両者で許容度の差があるのだ。

(14) 「そんなことヤコ (一) 知らん」「納豆ヤコ (一) 食べれんわ」の類

(15) 「ハワイ ヤコ (一) どう?」「これヤコ (一) よう似合うと思うんじゃけどな」「僕ヤコ (一) 花束よりケーキがええな。」の類

(14) と (15) では何が異なるのか。友定賢治 (1992) もヤコ (一) の用法として「軽視」「謙遜」と「取り立て」を区別したが、こうした議論は共通語でもナド・ナンカ・ナンテ等の例示の諸形式について、常に為されてきたものである。本稿の考察に関係する限りで述べれば、次の (16) には「とりたてたものが評価の低いもので検討の範囲をはずれていると話し手が考えている」(中西久美子 2005) ことが明瞭である。一方の (17) の場合、そうした直接的な低評価の表現であるとは考えにくい。このため「婉曲的例示」(中西 2005) などと呼ばれるものである。

(16) 「そんなことなんか知りません」「納豆なんか食べられません」

(17) 「ハワイなんかどう?」「これなんかよく似合うと思うんだけど」「僕なんか花束よりケーキがいいな」

(16) (17) に明らかな通り、共通語のナンカはこの低評価も婉曲的例示も、共に果たし得る。

それに対してヤコ (一) の場合は、(16) の低評価の類は特に違和感を覚えられない (表 42、43) のに対し、(17) の婉曲的例示の類については許容度の揺れが見られる (表 39、40、41) というわけなのである。

この結果が、「ヤコ (一) は婉曲用法を持ちにくい」といったヤコ (一) そのものの性質の直接的反映なのか否かについては、慎重であるべきだろう。今回の質問は全て短文にて行われたために、回答者によっては背後に低評価的文脈を補って理解した場合も、或いは逆に低評価的文脈が明示的でないと理解して回答した場合も、あり得る。今後この部分について、より限定的文脈を明示した調査を行うことで、ヤコ (一) の例示の性格の精密化を行う必要がある。

#### 4. まとめ

本稿で明らかになったことは次の通りである。

- ヤコ (一) は、県内出身者の許容度が高い岡山方言である。一方で県外出身者においては、県内に居住して岡山方言を一定程度理解しているにも拘わらず、ヤコ (一) については認知度が低い。

2. ヤコ（一）は次の通り係助詞・格助詞と接続する。
  - 1) 係助詞ハ・モに対しては専ら前接する。
  - 2) ヲ格の場合、格助詞が潜在する。顕在する場合は、ヤコ（一）の前接は或る程度許容される。またより少数ながらヤコ（一）の後接を許容する層も存在する。
  - 3) ニ格の場合、ニ格が潜在することも可能であるし、顕在する場合には前接も後接も可能である。

この結果、改めてヤコ（一）は副助詞と考えてよい。
3. ヤコ（一）は、卓立、最低限、極端などの文脈と齟齬する意味内容を持つ可能性がある。また、低評価のヤコ（一）に対して、評価に中立な婉曲的例示の用法の許容度が低い可能性がある。

本稿で述べたヤコ（一）のありようは、共通語の例示形式の考察にも問を投げかけるものであろう。ヤコ（一）が「最低限」に関係しようとしなのに「低評価」とは安定して関係を結ぶと考えられるとき、では「最低限」と「低評価」とは互いにどういう関係にあるのか。これはヤコ（一）についてのみ解明されるべき問題ではなく、ナンカ・ナンテ・ナド、或いはクライ、デモその他の副助詞類にも同様に問われるべき問である。本稿はこれに対する十分な回答を未だ持ち得ておらず、今後の課題としたい。

#### 注

- 1 下線は本稿の筆者による。なお、友定論文には用例にアクセントを標示する傍線が付されているが、これは省いて引用した。
- 2 以下、共通語の例示の形式としてナンカを代表させてヤコ（一）と対比するが、これはヤコ（一）の副助詞性の確認のためであって、それ以上にヤコ（一）とナンカの同質性を主張するものではない。
- 3 クライの「最低限」、デモの「極端」は、それぞれ一般的用語として仮に用いた。これらの語については別に星野佳之（2014）、同（2015）、同（印刷中）で考察したことがある。

#### 参考文献

- 国立国語研究所（1989）『方言文法地図』
- 友定賢治（1992）「岡山方言の研究（2）—副助詞「ヤコー」とその周辺—」『國語表現研究』第5号（国語表現研究会）
- 中西久美子（2005）「デモとナンカー例示のとりたて」及び「ナンカとナンテー低評価のとりたて」の項『新版日本語教育事典』社団法人日本語教育学会（大修館書店）
- 藤原与一（1976）『『瀬戸内海言語図巻』付録 説明書』（広島方言研究所）
- 星野佳之（2014）「クライの諸形式の整理—「暫定抽出」の副助詞、名詞化辞、助動詞」『ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編，文化学編，日本語・日本文学編』38（1）
- 星野佳之（2015）「クライナラ諸形式の整理—クライ補説」『ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編，文化学編，日本語・日本文学編』39（1）



星野佳之(印刷中)「現代語の副助詞デモの各用法について—いわゆる「讓歩」「極端」と「例示」の関係について—」『論究日本近代語 1』(勉誠出版)

附記 本稿を成すに際して、尾崎喜光教授より、参考資料の提供から調査方法に関する助言まで、一方ならぬ御教示を賜った。厚く謝意を表する。